

## 【論文】

# ルイス・キャロルの講話『頭脳を養う』

笠井 勝子

Lewis Carroll's Lecture *Feeding the Mind*

KASAI, Katsuko

要旨：1884年の*Feeding the Mind* は、比喩と話の運びに注目したいルイス・キャロルの読書論である。この講話がどこで書かれたかについて考察する。Duncan Black (1996年)とSelwyn Goodacre (1984年)はキャロルがオールフリタンを訪問する前と見なしているのだが、訪問中に書いたのであろうと推測する。

グッデーカー(1984年)に入っている写真版からキャロルの講話を訳出し、内容に関する詳しい注を付けた。また、キャロルの日記とグッデーカーの冊子に基づいてオールフリタン訪問に至る経緯、およびイーディス・デンマン、ウィリアム・ドゥレイパーのこと、彼らを訪ねた1884年の選挙制度改革にキャロルが深い関心を持っていたこと、などに基づいて、ルイス・キャロルとドゥレイパーの間にはこれまで注目されていない好感・共感が存在したことを考察する。

キーワード：Lewis Carroll, *Feeding the Mind*, Edith Denman, Rev W. H. Draper, Alfreton

## 0. はじめに

ルイス・キャロルの『頭脳を養う』は1884年にオールフリタン<sup>1)</sup>の牧師館で話した講話であった。独自の比喩によって聞くものを楽しませながら伝えたいことを分かりやすく語っている。本稿では、『頭脳を養う』の訳注をおこない、またグッデーカーの冊子<sup>2)</sup>を参照しながら以下について述べたい。

- 1 テクスト
- 2 訳注『頭脳を養う』
- 3 イーディス・デンマン
- 4 ルイス・キャロル、オールフリタンへ
- 5 ドウレイパー牧師と家族
- 6 ドウレイパー牧師とルイス・キャロル

「ドウレイパー牧師とルイス・キャロル」においては、『頭脳を養う』の話が生まれた経緯についてグッデーカーの推測している「イーディスに対する愛情<sup>3)</sup>」がさせたものとは別の解釈をおこなう。その根拠はグッデーカー自身が綿密に調査したイーディスの夫ドウレイパー牧師にあると考えられる。キャロルはおそらく牧師ウィリアム・ヘンリー・ドウレイパーの優れているところ、とりわけその詩才を見抜き牧師館滞在中の会話が『頭脳を養う』へと発展したのであると推測する。

## 1 テクスト

一般の人に向けてキャロルがおこなった講話 (lecture) として残っている例は珍しい。オクスフォードでは友人、知人の牧師に頼まれて日曜日の礼拝で話をしたという記録は日記の所々にみえるが、その内容をキャロル自身が書いたものは残っていない。キャロルがオールフリタンへ行った100年後を記念して1984年にセルウィン・グッデーカーは全部で8章と付録で構成される29頁の冊子を出して、そのなかにキャロルが手書きした講話の複写とそれをタイプ印刷したテキストとを収録し、講話が誕生するまでの背景についても解説した。それが、*Feeding the Mind - A Centenary Celebration of Lewis Carroll's visit to Alfreton in 1884* である。このセルウィン・グッデーカーの100年記念の冊子は、第1章でキャロルとデンマンとドウレイパーについて述べ、第2章はキャロルのオールフリタン訪問のこと、第3章はオールフリタン訪問に先立つ夏休みにキャロルの頭を占めて

いた公平な選挙の方法のこと、第4章はイーディス没後からドゥレイパーの死まで、第5章はキャロルが手書きした原稿の辿った道、そして第6章に『頭脳を養う』の手書きの復刻を載せ、第7章はグッデーカーが簡単な注(24項目)をつけたタイプ印刷のテキスト『頭脳を養う』、第8章にはキャロルがチャールズ・L. ドジソンの実名で出した「選挙制度見直し」(Redistribution)を載せている。これは政府が選挙制度を見直すことを明らかにしたところでキャロルが公平な選挙をおこなうための原則に関する提案をおこなったものである。この年の7月5日にはキャロルの「議会選挙」(Parliamentary Election)という投稿が「セイント・ジェームズ・ガゼット」新聞に載っている。同年10月11日に「セイント・ジェームズ・ガゼット」新聞に掲載された「選挙制度見直し」(Redistribution)によってキャロルは理想的な選挙はどのようなものか、また自分の考え方に従うと有権者の数に応じた選挙区の議員の数を公平に得ることができると論じている。

グッデーカーは冊子の最後に付録として「W. H. ドゥレイパーの著述一覽」を付けている。第6章および第7章以外は『頭脳を養う』とは関わりはないように見えるが、キャロルが1884年秋にオールフリタンへ行くまでとその後についての経緯を詳しく扱っていること、特に選挙を公平におこなうためのキャロルの提案を挙げていることは興味深い。グッデーカーにはこの時期にキャロルが考えていたアイディアに注目を促そうとする狙いがあったようだ。この新しいアイディアが1884年の夏から秋にかけてキャロルの頭を離れなかったことは、ドゥレイパーとキャロルについて考えるうえで参考になる。それはこの小論の終わりに述べたい。

今回参照したテキストは、グッデーカーの1984年版のほかに、次の二種類がある。一つは、キャロルから原稿を手渡しされたウィリアム・ドゥレイパーが1907年11月にロンドンのチャーター・アンド・ウィングスから自ら9頁のNote(まえがき)を付けて出版していたものをアメリカのフォルクロフト・ライブラリが復刻して1973年に100部限定出版したもの<sup>4)</sup>。

もう一つの参照テキストは1999年にアメリカ、フロリダのリーヴンジャー・プレスから出た挿絵付きの版<sup>5)</sup>。エドワード・コーレンの挿絵<sup>6)</sup>は内容を的確に表現しているので、挿絵にうるさいと言われたキャロルもこれを見ればおそらく気に入ったことであろう。

グッデーカーによれば、手書き原稿（MS）の原寸は縦29cm、横22.6cmの大判で、キャロルがよく使用していた紫のインクで書いてある。あまりの大判のため原寸大で印刷した版はなく、ドゥレイパーが出した1907年の版を復刻した1973年版が22×14cmである。余白が多く、テキスト部分についていえば12×7cmである。1999年のコーレンの挿絵付き版のサイズは6×4インチ（15.2×10.1cm）。グッデーカーの1984年版は28.5×20cmで、ここに挙げた3つの版のなかでは一番大きいのが、原寸大で作ることは扱い難さから断念したという。

手書き原稿が紫のインクを用いていることはドゥレイパーが「まえがき<sup>7)</sup>」(Note)に書き留めている。グッデーカーその他の編者はふれていないが<sup>8)</sup>、手書きした用箋の縁は黒枠になっている。こうした用箋は近親者に不幸があった場合、書く内容と関係なく1年間使用する習慣があった。モートン・コーエンが『手紙集』のなかに付けたドジスン（キャロルの本名）家の家系図によれば、「頭脳を養う」の話が生まれた1884年はキャロルの父の弟であるハッサード・ヒューム・ドジスン<sup>9)</sup>が亡くなっている。手書き原稿の黒枠の用箋はそのことを表しているようだ。

## 2 訳注『頭脳を養う』

体は運が良い! これを養うための気遣いときたら、朝食、午餐、夕食<sup>10)</sup>、極端な場合は、朝食、昼食、正餐、お茶<sup>11)</sup>、夜食、就寝前の暖かい飲み物。同じようなことをいったい誰が頭脳のためにやっているだろうか？ この待遇の違いの原因は何だろうか？ 体と頭脳、二つのうちで体ははるかに大切なものなのか？

いや、そんなことはない。ただ、人の「命」は体にものを食べさせこれ

を養うことにかかっている。一方、われわれは動物としては（人としては言わないが）頭脳がまったくないがしろにされて飢えていても、存在していくことはできる。したがって、自然は掟を定めて、われわれが身体のことをまるで顧みない場合には非常に具合が悪くなり苦しみに襲われるようになっている。そのためわれわれはすぐに自分の勤めを思い出す。また自然は、生命のために必要な働きについては人間に選択の余地はなく、すべて備えてくれている。もしも、人間が消化や血液の循環を自分で管理するように任されていたとしたら、多くの者にとっては、当然と言えば当然の、そして困った結果になることだろう。「たいへんだ！」と、叫ぶ、「今朝、心臓のねじを巻くのをわすれてしまった！ この3時間というものの心臓が止まったままだった！」「君と昼から散歩には行けないよ」と友だちは言う、「ぼくはこれから午餐を11食分消化しなくちゃ。先週からずっと摂らないで待たせておいたのだ。忙しかったからね。それで医者は、これ以上放っておくなら、どうなるか知らないぞ！ って言うんだ。」

身体を粗末にするとすぐに目で見てわかるし、自覚症状も出るということは、人間にとっては良いことだと言える。仮に頭脳も体と同じように目で見て手で触って分かるようになっていたら なかにはその方が良かった人もいるだろう。つまり、仮に頭脳を抱えて、たとえば医者に行き、その脈を診て貰うとしよう。「おや、近頃この頭脳はどうなさいましたか？ どんな風に食べさせておられますか？ 顔色が悪いし、脈も非常に遅い。」「あ、う、先生、近頃はきちんとした食べ物をちゃんとやっていないのです。昨日は砂糖菓子<sup>12)</sup>をたくさんやりました。」「砂糖菓子ですと？ どういう種類の？」「あ、う、それがなぞなぞ<sup>13)</sup>でして、」「ああ、そんなことだと思ったよ。では、いいかい、私の言うことに気をつけるのだ。もしそういういい加減なことをやっていると、そいつの歯をみんな駄目にするぞ！ そうして知能消化不良を起こして寝込むことになる。これからの数日は一番易しい読み物以外はいけない。さあ、大事にして！ 小説は絶対にだめ！」

身体に食物を与え薬を飲ませるということにかけては、大抵の人が努めて忘れない。ということを見ると、そこに働いている法則をいくつか頭脳に当てはめてみる価値があるだろう。

まず、われわれの頭脳のためにふさわしい食べ物を与えることから考えよう。何が身体によく、何がよくないかは経験ですぐに分かる。だから美味しそうなプディング<sup>14)</sup>とか、パイとかを断るのにそれほど苦労はない。プディングやパイの誘惑に対しては消化不良の不快さを結びつけばよい。消化不良というだけでたちまちルバーブ<sup>15)</sup>とマグネシウム<sup>16)</sup>を思い出してしまうから。それなのに、われわれが好んで取り上げる読み物のなかにはひどい消化不良を引き起こすものがあるということが自分で分かるようになるまでには、幾度も同じことを繰り返して懲りることがない。幾度も繰り返してわれわれは不健康な小説を食べ物として摂り、その後は決まって気力が挫け、仕事には精が出ず、生きていることに倦怠を覚える。これは、頭脳が見る悪夢によって起きることだ。

そこで間違いなく、頭脳には次のように健全な食べ物を適切な分量だけ与えなければならない。大食い知能、言い換えると過度の読書は危険な性癖で、消化力を弱らせ、場合によっては食欲失調に至る。たとえばパンは良いものだし、健康のためになる食べ物である。だからといって、一度に2山も3山も食パンを食べる人がいるだろうか。私は患者に次のような話をする医者のことを聞いたことがある。患者の症状は、ただの大食と運動不足だったのに、そのことを「栄養超過の初期症状は脂肪組織中に生じる脂肪質の堆積である」と言ったのだ。間違いなく、この仰山な長い言い回しは、増え続ける脂肪のお荷物を背負っているあわれな男にはいたく感銘を与え慰めになったのだ。もしかして、自然界には肥満頭脳というようなものがあるのだろうか。実は、私はそういうものに一つか二つ出会ったことがあるように思う。そういう頭脳は、心地よいテンポ<sup>17)</sup>の会話についていけず、論理の垣根をきれいに飛び越える<sup>18)</sup>ことができず、いつもきゅうくつな議論の小径で行き詰まり、要するにわれと我が身をどうするこ

ともできずに世の中をふらつき歩くしかない。

さて、食べるものが良くて量が適切でも、一度に種類をあまりたくさん摂ることはよくない。乾し草作りで喉が渴いた人にビールを1クォート<sup>19)</sup>かりんご酒<sup>20)</sup>1クォート、あるいは冷めた紅茶1クォートを上げれば、きっと感謝するだろう(もっとも冷めた紅茶<sup>21)</sup>では喜ぶかどうかかわからないけれど)。ところがもし、ビールを小ジョッキ一杯、リンゴ酒小ジョッキ一杯、同じように冷めた紅茶1杯、熱い紅茶1杯、コーヒー1杯、ココア一杯、同じように一杯づつミルク、水、水割りのブランデー、それにバターミルク<sup>22)</sup>をお盆に載せて出したら乾し草刈りの人はどんな気持がするだろう。分量は全部を合わせて1クォートくらいだろうが、その人にとっでは結果として同じことだろうか。

以上で知能食には適切なもの、分量、種類が必要なことが分かったので、あとは、食事と食事の間に適切な間隔をおくこと、また咀嚼を十分におこない、食べ物を慌てて飲み込んだりしないということに注意しなければならぬ。どちらも身体に当てはまることで、それはそのまま頭脳にも当てはまる。先ず、間隔について。これは身体にとってそうであるように、まことに大事なことである。ただ違うところは、身体の場合は次の食事までには3、4時間の休憩を必要とするが、頭脳はたいていの場合3、4分の休憩で足りる。この必要な間隔というのは一般に想像されているよりも、私ははるかに短くてすむと思うし、個人的な経験からは数時間ずっと一つの問題を考えている場合には、休憩をとること、例えば一時間に一回5分間くらい取り、そしてその都度やっていたことをすっかりやめて5分間だけは頭を切り替えてまったく別のことに向けることをお勧めしたい。こうするとその短い休憩時間に頭脳が取り戻す勢いと弾力とは驚くばかりである。次に、食べ物の咀嚼のこと。これに対応する知能のプロセスは、読んだことを熟考することである。これは、著者の書いたことをただ受動的に取り入れるのに比べてはるかに頭脳にとっては骨の折れる仕事である。それがあまりにも骨折り仕事であるために、ちょうどコールリッジ<sup>23)</sup>が言って

いるように、頭脳はしばしばそういう面倒をやることを「憤然と拒絶する<sup>24)</sup>」。それがあまりの骨折り仕事であることからまったく無視して、すでに入っている未消化のものの上にまた新しく食べ物を注ぎ続け、ついに不幸な頭脳は注ぎ込まれたものの中で溺れる羽目になる。だが、骨折りが大きければそれだけ確実に成果も大きい。ある問題について一時間しっかりと考えること（他にも方法はあるが一人で散歩をすることもそのためのよい方法）は、2,3時間読み続けることに匹敵する。

また、読んだ本を完全に消化する、言い換えれば頭脳の中に入ったテーマについてきちんと配列してラベルを貼ることをしておけば、もう一つ別の効果があることを考えてみよう。こうすれば必要なときにはすぐに参照することができる。サム・スリック<sup>25)</sup>は、自分は生涯で数力国語を覚えたと言っている、ところがどうしたことかそれを頭のなかで「整理分類ができない」。彼だけではない、消化を待たずに何かをきちんと整理するのも待たずに本から本へ急ぐ頭脳は多い。そして「整理分類できない」状態になり、不運な頭脳の所有者は友人みなが自分について言ってくれることは「完璧な読書家、さあ、どんな問題でもいいから彼を試してごらん下さい、彼が戸惑って困るなんてことは先ず聞けないだろうから」という贅辞をもらっても、自分はそういう人物とはほど遠い、と分かっている。君がその完璧な読書家に向かって質問をする、例えばイギリスの歴史のことを（彼は、ちょうどマコーレー<sup>26)</sup>を読み終えたところだということから）。彼は人の良さそうな笑みを浮かべて、英国史をみんな知っているふりをする。それから、頭脳のなかに飛び込んで答えを探しにかかる。片手にいっぱい有望な事実が取り出される、しかし調べてみると別の時代の話である。そこで再び潜り込んで探す。2回目に網を揚げたら前よりもほんとうらしいことが出てくる。だが、不運にも網に絡みついて別のことまで一緒に付いてきた。即ち、政治的経済問題のこと、計算規則、弟の子供たちの年齢、それに 그레이の哀歌<sup>27)</sup>の一節。こうした事柄のなかで必要な事実はどうしようもないまでにねじれ絡まりついてしまっていた。その間も、みんな

は彼の答えを待っているから、沈黙はますます気詰まりなものになり、完璧な読書家は仕舞いに中途半端な答えをしどろもどろに口にする。学校の生徒ならもっとはっきりと満足に言えたであろうに。これはみんな自分の知識をきちんとまとめて整理してラベルをつけておかないせいだ。

あなたは頭脳に間違った食事法をおこなった犠牲者をひと目で見抜けますか？ あるいは、そういう人ではないか、と疑ってかかれますか？ 見ているとそういう人は閲覧室を憂鬱気に歩きまわり、一皿一皿味見 おっと失礼、一冊一冊 味を見ては、しかしどれ一つじっくりとは味わわない。先ずは小説を一口、いや、だめだ！ 先週はそれ以外のものは食べていなかった、だからもうその味には飽き飽きしている。それから科学を一切れ、だがそれがどういうことになるだろうかは直ぐに分かる そう、勿論、彼の歯には固すぎる という具合に、いつもやっている倦怠のひと巡り。それを彼は昨日やった（やって、うまくいかなかった）またきっと明日もやるだろう（またうまくいかないだろう）。

オリヴァー・ウェンデル・ホームズ<sup>28)</sup>氏はその非常に楽しい著書、『教授、朝の食卓で』のなかで、人が若いか年をとっているかを知るために次のような目安を提供している。「決定的な方法はこれだ。量のある丸パンを正餐のちょうど10分前に被験者に上げてごらん。直ぐに取って食べたなら若いと分かる。」ホームズは言う、人が「もし若ければ、何でも食べる、昼でも夜でも何時でも」。そこで人間という動物の知能食欲の健康度を測るには、短くて良く書けている、しかし誰でも知っている問題を扱ってあまり好奇心を刺激するようなものではない論文 つまり知能パンを、手に載せてやるのだ。もし興味をもちよく集中してその本を読んでいるなら、そしてもし読んだ後でそのテーマに関する質問に答えられるなら、頭脳は第一級の活動状態にある。もしその本を手にとってから丁寧に再び下に置く、あるいは少しの間ぱらぱらと拾い読みをして、それから「こんなばかばかしい本は読んでいられない！ ぼくに『ミステリー殺人』の第二巻を渡してくれませんか？」と言えば、知能消化のどこかに不具合があること

は間違いないと思ってよい。

仮にこの小論が読書という重要な問題についてなにか有益な手がかりをみなさんに差し上げることができたら、そしてみなさんが出会う良い本を「読んで、印をつけて、学んで、自分のなかで消化する」ということが、みなさんのためであるばかりか勤めでもあるということをお分かりになっていただけたら、この小論の目的は達せられます。

### 3 イーディス・デンマン

北ダービシャー州にあるオールフリタンに1884年9月、キャロルは教区牧師のW. H. ドウレイパーとその妻イーディス（旧姓デンマン）を訪ねた。そのとき牧師館<sup>29)</sup>で内輪に人を集めて話をしたのが『頭脳を養う』である。

キャロルがイーディス・デンマンを初めて見たのは1864年7月で高等法院判事G. デンマンの家<sup>30)</sup>を訪ねたときのことだった。当時イーディスは9才<sup>31)</sup>、その頃から絵が好きな少女はキャロルに粘土で作った自分の肖像を見せていた。翌年キャロルはイーディスの母デンマン夫人を訪ねて<sup>32)</sup>イーディスにオルゴールを贈っている<sup>33)</sup>。この年の11月に初めて『不思議の国のアリス』を出版し多くの人に本を贈呈した。そのなかにイーディスの名前も入っている<sup>34)</sup>。1876年には同年出版した『スナーク狩り<sup>35)</sup>』にイーディスの名前でアクロスティック詩を書いて贈った。次のような詩で、左端の文字を縦に読むとイーディスの名前になる

イ　ま目隠しの覆いは　その両の目に  
ー　掛かっているも<sup>36)</sup> 判事の娘よ天秤  
デ　注意して　公正に秤をあつかえば  
ィ　ざ　真実と正義が告げ知らせよう  
ス　ナークたちを狩るのは無邪気で賢明

Even while the blinding bandage lies,  
Daughter of a Judge, upon thine eyes,  
If the scales thou wield with care,  
Truth and justice will declare,  
Hunting Snarks is innocent and wise!

1878年5月12日のキャロルの日記には、デンマン夫人、イーディス、グレイスに会ったこと、14年前に初めて会ったときと少しも変わらず感じがよかったことを書いている。イーディスは23才になり絵はますます上達して、「とても興味深い線画」を出してキャロルに見せた。イーディスの好みは「自分（キャロル）と同じ、人物の線画」と日記にある。

この訪問の数日後にイーディスに送った手紙から次のような1節をグッデーカーが引用<sup>37)</sup>している。

「君の言い分には早とちりなところがあって、それを私は残念に思うのだが、その言い分によると私には君ほど人物線画を好きだということはありませんか！ この点で納得できる決着をつけるにはきみとぼくの線画に対する二つの愛着を同じ単位で計測することができて可能になるね。では、喜びの測定値を出す単位（これを私はむかし提案し、これを学会はいまだに採用していないのだ！<sup>38)</sup>）は「人が1時間人物線画をして得られる喜び」とする。これを1単位とする方法で私たちは数を比較することができるね、私の数は235....」

この3年後の1881年4月29日にはオクスフォードの川沿いを歩いてイーディスのためにパイモ<sup>39)</sup>を取りにいき、一束摘んで濡らした綿でくるみ、金属の箱に納めてロンドンへ送ってやった。イーディスがそれを絵に描きだっていた、という。その年の終わり頃イーディスからはキャロルに一人の村の子どもを描いた油絵が届いた。パイモがその絵に描いてあったのかどうかはわからない。

イーディス・デンマンがウィリアム・ドゥレイパーに出会った<sup>40)</sup>のは1881年から82年頃のこと、彼は貧しいが優秀な神学生だった。ウィリアム・ヘンリ・ドゥレイパーは1855年にケニルワースのヘンリ・ドゥレイパーの5番目の息子として生まれ、1875年に19才でオクスフォード大学キープル・コレッジに入学し1875年から1880年まで給費生、1882年には修士の学位を取得した。しかしデンマン家では身分の相違



を考へて結婚に強く反対する。反対に遇つた二人はしばらく会うのを止めていた。ところがある時プレストンの駅で偶然に再会した。プレストンはランカスターとマンチェスターを結ぶ鉄道の乗り換え駅で、ランカスターからは南東34キロ、ロンドンからは北北東に347キロの所にある。当時ロンドンからプレストンへは一旦マンチェスターに出てそこから乗り換えていく長時間の鉄道の旅<sup>41)</sup>である。そのプレストン駅での出会いには、偶然以上の運命を感じたことであろう。二人は、結婚する強い意志を確かめ合い両親に告げる。ここに至って反対は解け、希望が叶った。(写真はパイモ。西村光雄氏提供)

1883年1月16日のキャロルの日記は、イーディス・デンマンが婚約者のウィリアム・ドゥレイパーと共にオクスフォードの自分の部屋を訪ねてきたことをとても喜んでいる。「すてきなイーディス・デンマンが3時に来た、婚約者のドゥレイパー君と一緒にだ。5時まで私が撮った写真などを見ていた。私は二人と歩いて駅まで行った。」馬車に乗る身分であったはずのイーディスは歩くことを厭わなかったらしい。キャロルはこの日、二人にたいへん好感を持ったようで、喜ばしいことのあった日に書く「白い石で印をつけておく」ということばを日記に記している。

イーディスとウィリアムはオクスフォードにキャロルを訪ねてから5か

月後の1883年6月19日に結婚した。ドゥレイパーはこの時、イングランドとウェールズの境に近いシュリユーベリにある聖マリア教会で分教区牧師の禄を受けていた。二人はここで結婚生活を始めた。しかし、その年の終わりにはオールフリタンに引っ越している。ここは北ダービシャー州の栄えている町で、牧師となって未だ日も浅いドゥレイパーがどうやって条件の良い教区の牧師に移ることができたのかについて、背後にはそれとなくデンマン判事の力があつたのかもしれない。デンマン判事はオールフリタンの聖職禄のパトロンまたその大地主であり教会と牧師館<sup>42)</sup>の傍のオールフリタン・ホールに住んでいるノーウッド家およびその一族と親しかった。

牧師夫人としてイーディスは土地の女子教育に尽くし人々から慕われる。キャロルは二人の結婚の翌年9月末にオールフリタンへ訪ねていく。

#### 4 ルイス・キャロル、オールフリタンへ

1884年の夏をキャロルはいつものようにイーストボーンのリシントン通り7番地の家に間借りして過ごした。夏の初めの頃には選挙の比例代表制に関して一連の重要な書状を書き、セント・ジェームズ・ガゼット紙に投稿を一つ送った。日記には出ていないが、休暇中に複数の新しい説に取りかかっていたようだ。やがてそれを一緒にしてまったく新しい考え方による「議会代表制の原則」というものをまとめたいと考えていた。

9月10日にキャロルはイーディス・ドゥレイパーへ9月20日に訪ねる希望を手紙で伝えた。しかし、その日は先方の都合が悪く、結局イーストボーンを出たのは9月22日だった。日記によれば、「ドゥレイパー氏が駅まで来てくれて、およそ1マイル<sup>43)</sup>を一緒に歩いて家まで行った。夜、風邪でおこりのような発作に見舞われた」。翌日には熱がおさまり、選挙の比例代表制についてさらに検討を進めたり、お客に会ったりした。「可愛い子供たちがふたり」やってきた。デージー・ウィルスン<sup>44)</sup>とキャティ・パーンズであった。しかし夕方(到着した翌日の夕方)になって熱がぶり

かえし、驚いたイーディスがノッティンガムへ人をやり、掛かり付けの医者ビグード先生を迎えた。翌朝、医者はキャロルの胸部をよく診察し、「まったくの健康人」と折り紙をつけて、目下罹っているのはおこり型の発熱性の風邪だと診断した<sup>45)</sup>。回復は速やかだった。9月25日木曜日には、リンカンの司教座聖堂参事会員で後にロチェスターの聖堂参事会長になるサミュエル・レイノルズ・ホール(1819-1904)が訪ねてきた。S. R. ホールはノッティンガムに住んでいて、9月25日の祝祭日の説教をするためにオールフリタンに来た。

キャロルは日記に次のように書いている、「ホールはジョン・テニエル<sup>46)</sup>の知り合いで、パンチ誌のスタッフを知っていた」。しかしそこに書いていないことが起きていた。ドゥレイパーによると、

愛想のよい、だがどうみても引っ込み型ではない聖堂参事<sup>47)</sup>がやってきた。彼は自分でも何をしているのかは自覚のないままに他の来訪者のいるところで、ドジスン氏はその本(『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』)の著者であるということを口にしてしまった。この来訪者が立ち去ると直ぐに怒りが炸裂しこちらも気の毒に思う深刻な態度で、もしも同じ人の来訪がまた繰り返される危険がある場合には、前もって知らせてくれるよう、また自分が引っ込んでいることができるようにしてほしい、と頼まれた。

その先8日滞在している間に、ルイス・キャロルは牧師館で話をした。その席では本名のチャールズ・ドジスンで紹介してもらい、人々が知っている『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の作者ルイス・キャロルであることは伏せてもらった。ドゥレイパーは次のように書いている。

... キャロルは友情のゆえに、彼としてはたいへん異例のことだが人々の前で講話をしてくれる、と約束をした。

私はよく覚えている、彼は神経質で極度に緊張した様子で、小さい部屋いっぱい集まった田舎の素朴な人々の前に立った。その人々のなかには目の前に立っている瘦身の内気な人が世界的に名前を知

られた人であると知る人はほとんどいなかった。

講話が終わったときに、キャロルは手書きの原稿を私に手渡ししながら、こう言った、「これはあなたのよいようにしなさい。」

10月4日土曜日のキャロルの日記には、「3日のつもりが、12日間も滞り込んで自分自身をひどい目に<sup>48)</sup>遭わせてしまった！」とある。

## 5 ドウレイパー牧師と家族

ルイス・キャロルがオールフリタンへ行ったとき、イーディス・ドウレイパーは身ごもっていて3月後の12月15日に男の子が生まれた。正常に月満ちて出産したという記録である。しかしすべてが順調だったわけではなく、イーディスは産褥熱だろうといわれているが肥立ちが悪かった。病床にあっても教区の人々の動静を尋ね心にかけていたという。そしてクリスマスになるとイーディスは牧師の夫に「教区のみなさんへ私からたくさんの良いことをお伝えしてくださいね」と頼んだ。

12月30日、イーディスは亡くなった。結婚して1年半で生まれたばかりの子どもを残して。教区の雑誌には、次のように出ている。彼女がオールフリタンで暮らしたのは1年半にも満たないが、「多くの人がイーディスを親しく思うようになり、また彼女の方でもそこに住む人々みな気が持ちよく暮らせるようにということに深く関心を寄せていた。その一つがオールフリタン少女部会として実を結んだ。これはイーディスが少女たちのために作りいろいろと心にかけて育てていた。金曜日の夜におこなっていた縫い物教室は出産後に再開できることを心待ちにしていた。1年前の冬には、この教室がとても楽しいと喜んでいた。」

1885年1月2日、イーディスは教会墓地の一隅で牧師館に一番近い緑陰に埋葬された。告別の礼拝はシュリユーベリの聖マリア教会の牧師キャノン・ロイド師、同じく聖マリア教会の牧師C. T. エイブラハム師、そしてオールフリタンの副牧師H. A. ヒル師がおこなった。イーディスの妹のグ

レイスが姉の看病に来ていた、そのグレイスと両親、それに第二人、そしてドゥレイパー側の家族たちが葬式に参列した。

生まれた子ども、マーク・デンマン・ドゥレイパーは1885年1月25日に洗礼を授けられた。

その年の9月にはイーディス・ドゥレイパーを記念するステンドグラスが教会の北の側廊にできた。教区の人々からの贈り物で、教区の雑誌には次のように出ている。

（ステンドグラスの窓には）ふたりの天使の姿がある。ひとりとは跪いて祈っている、手には巻物を持ち、巻物には「汝の平安を我らに与え給え」ということばがある。もうひとは天から下りてきているような姿をした天使で、「見よ、私はあなたがたに大いなる喜びの嬉しい知らせを持ってくる」という神のことばを持っている。窓全体は、私たちを愛しておられる父なる神ご自身の善を表し、その神は私たちが平和を求めるときには喜びを与えてくださることを表している。二人の天使の姿はこの窓によって記念するイーディス自身が描いていた絵のなかから選んだ。色彩はとても豊かで美しい。ステンドグラスの窓は全体に優しさで詩情にあふれている。これ以上にふさわしい記念の印はないだろう。窓の下には、次のことばがある。

「オールフリタンの教区司祭ウィリアム・H. ドゥレイパー師の妻イーディスを記念して。1884年12月30日没。享年29。この窓は教区の友人たちからの贈り物である。」

ステンドグラスはエグゼター<sup>49)</sup>のF. ドゥレイク氏が制作している。氏は過去にエグゼターの町の大聖堂<sup>50)</sup>にあるステンドグラス<sup>51)</sup>を数枚手がけていた。この記念の窓のための40ポンド<sup>52)</sup>はあらゆる階層の人々から喜んで寄付が寄せられた。

このステンドグラスの窓は現在見られない。1956年に新しい聖具室を作ることになり、その入口にあたる場所にこの窓があった。セルウィン・

グッデーカーの綿密な調査にもかかわらず、取りはずされた窓がその後どうなったのかは明らかになっていない。

ドゥレイパー牧師は妻のイーディスが亡くなって6年後の1889年にオールフリタンを後にして、再びシュリユーベリーへ移り、そこのアビー教会<sup>53)</sup>の牧師になった。息子のマークはその時6才であった。成人したときに彼は非常によく顔立ちをしていたという。そして初めは事務弁護士<sup>54)</sup>の実務実習生になったが、それから舞台俳優に、さらに写真家になった。その後自分で劇団を持ち、芝居のプロデューサーとしてある程度成功した。1917年に英国空軍に入隊し、その2週間後に訓練飛行中の事故で死亡した。33才だった。マーク自身が希望していたのかそれとも父親の希望によるものかは分からないが、彼はオールフリタンで母イーディスの墓の隣に並んで埋葬された。

ドゥレイパーはシュリユーベリーで再婚し、土地の人々から慕われ、由緒ある教会にいろいろな改変をおこなった。本陣の屋根の葺き替えと教会建築で明かり層とよばれる部分をノルマン風に復元したのもその一つである。ドゥレイパーは復元が終わると(1894年)礼拝で使う賛美歌「われらが感謝を捧げる日に」を作った。彼の在任中には新しい牧師館が建てられ、学校が立て直された。1899年2月2日の「シュリユーベリー・クロニクル」は、ドゥレイパーがシュリユーベリーを去る時に、感謝の贈呈式がおこなわれたことを伝えている。ドゥレイパー牧師には3台の銀の枝付き燭台と贈った人々の名前を入れた芳名帳、それに100ポンド小切手が贈呈された。二度目のドゥレイパー夫人には銀のコーヒーポットが記念に贈られた。

シュリユーベリーを出てドゥレイパーはリーズに近いアデル<sup>55)</sup>に移った。ここでは小さなノルマン教会を受け持った。この教会は昔のままの純粋なノルマン建築が残っている最上の例の一つと言われる。ドゥレイパーにはそこがとても快適だったようでそれからの21年間はそこで教区司祭

のかたわらペンを執りたくさんの作品を書いた。教区と教会の歴史<sup>56)</sup>の著述があり、100部出版していた。

1920年にドゥレイパーは最後の栄進をした。ロンドンの 神殿法学院 (ザ・テンプル) の院長に任命されたのである。神殿法学院教会は4つある法学院のうちの2つに属し、弁護士の専用礼拝堂と見なされている。そこは主教管区の特例で教区を持たず、ロンドン大主教の権威にも従うものとされず、国教会の首長である国王の支配権に直属するもので、国王がその院長を任命する。この地位には威信があった。院長は大学の学寮礼拝堂付き司祭に相当した。

この役を13年間務め非常に豊かでまた変化のある人生を送ったドゥレイパーは1933年に亡くなった。創作した賛美歌によって彼の名前は記憶に残ることであろう。そのなかには、「われらが神で王である方が創られたものすべては」というすぐれた賛美歌がある。『改訂、昔と今の賛美歌』の新しい版には「われらが...」の歌が、「主よ、われらの救いのこの聖週間に」と「感謝を捧げる日に一つの聖歌を捧げます」と共に入っている。この最後の歌はシュリユーベリーのアビー教会の修復が終わって奉納のためにドゥレイパーが書いた聖歌である。

## 6 ドゥレイパー牧師とルイス・キャロル

キャロルが1884年にオールフリタンへ出かけてイーディスと夫のドゥレイパーを訪ね二人の住む牧師館に泊まったことは、特別例外のことではない。彼は、スコットランドへ行き、そこで結婚した若い夫婦を訪ねて泊まっている。オールフリタン滞在が特別なことになった要因はイーディスではなく、ドゥレイパーにあったのだと思われる。9才の頃から時々見ていた子どもが若いしっかりとした女性に成長して、キャロルは彼女を素敵な女性だと思っている。日記のなかでキャロルはイーディスについてはひとこと'nice Edith Denman'と書き、母親のデンマン夫人とイーディスを含めて子供たちをさして delightful と書いている。とても気持ちのよい人々だ

った、ということだが、イーディスについては、pretty, lovely, beautiful, charmingということばは見られない。真面目で誠実でユーモアが通じる素敵なお嬢さんのイーディスが、親の反対に遇っても、忍耐強く時を待って結婚した相手のドゥレイパーにキャロルは心底祝福の気持を抱いていただろう。それは二人が結婚する前にオクスフォードまで訪ねてきてくれたときの日記にうかがえる。その日はキャロルにとって、「白い石」で記念しておく特別によい日になった。駅まで歩いて二人を送っていくということもキャロルの気分の良さを語っている。若い女性ひとりであれば、駅までエスコートをして送っていくことは当然のエチケットであるが、若い二人を送って行くことは特別にそうしたかったからであろう。とりわけドゥレイパーは学生時代をオクスフォードのキーブル・コレッジで過ごしていたから、町の中を案内して歩く必要はなかったのだ。神学で修士号を取り牧師になっているドゥレイパーのなかにキャロルは頭が良く、話していて楽しい聞き手を見つけたのだ。ドゥレイパーは詩を書き、賛美歌を作る。キャロルは詩を書き音楽を好んだ。神学と詩と歌の三拍子を揃って持つオクスフォード出身の若き後輩は、謙虚で押しつけがましいところがない人柄でキャロルは快適に居心地よく、3日間の予定の滞在が12日間までにもなった。夏の間イーストボーンで構想を書いていた公平な選挙をおこなうための選挙区への議員の割り当て数と有権者が投票できる票数（1人が複数票を持つ場合）に関して検討した提案をドゥレイパーに話して聞かせたことだろう。セイント・ジェームジス・ガゼット誌の記事にはイーディスが関心を示すより、ドゥレイパーの方がよりの確な相槌が打てたのに違いない。そして、*Feeding the Mind* がある。これも、ドゥレイパーとの会話の中から洗練されていった話ではないか。キャロルは先ず初めに人に話して聞かせることが巧みで、その話を是非、他の人にも聞かせてやって欲しい、というドゥレイパーの頼みだったのかもしれない。『不思議の国のアリス』の場合がしかり、『鏡の国のアリス』の話も断片的に語られていた。『シルヴィとブルーノ』の場合もソールズベリ卿の館<sup>57)</sup>のクリスマスから

新年<sup>58)</sup>にかけて子供たちに話した妖精物語が始まりであった。

以上は事実のうえに立って推測した話である。それは12月に出産を控えているイーディスだけを目当てにして、しかも口実のために熱を出して滞在を長引かせたという憶測をするダンカン・ブラックと、それは少し行き過ぎだとしながらもその説を繰り返して一理あるというグッデーカーとに、敢えて異なる推論を述べてみた。グッデーカーがおこなったドウレイパー牧師の賛美歌や教区の歴史についての業績に関する綿密な調査を裏付けとして、ブラックの考えとは異なる推測が可能になることを述べた。

終わりにグッデーカーが見出したドウレイパー牧師による詩を訳して結びとする。

おまえの顔をのぞくとき、幼い息子よ、 When I look in your face, little lad,  
私にはとても愛しかった おまえの母、 Whose mother to me was so dear,  
楽しくて喜びあふれるおまえの背後に、 Behind all that's merry and glad,  
私には暗い嘆きが見てとれる気がする、 I can see the dark grief that I fear,  
おまえの顔をのぞくとき、幼い息子よ。 When I look in your face, little lad.

おまえの可愛い声を聞く時に、幼い息子よ、 When I hear your sweet voice, little lad,  
怖い物知らずに無垢な遊びに夢中になって、 With its fearless and innocent mirth,  
私は遥かに聞いている—ああ、何と哀れ！ I can hear far away - oh, how sad! -  
地上において人間が 苦悩のなかで叫ぶ声、 The cry of man's pain upon earth,  
おまえの可愛い声を聞く時に、幼い息子よ。 When I hear your sweet voice, little lad.

W. H. ドウレイパー作 *Poems of the Love of England* (1914年) より

注

1) Alfreton はアルフレッド大王(871-899)の名前に由来する古い町。エセルレッド王(在位978-1013, 1014-16)の特許状にはAlfredingtuneと出ている。ロンドン

- の北北西 224 キロ、ダービーからは北北西 22.4 キロのところにある ( from *Topographical Dictionary of England*, 1848, reprinted edition, 1995. )
- 2) *Feeding the Mind*, Carroll Studies No. 8, Selwyn Goodacre, 1984.
  - 3) 'Edith was becoming one of the favoured few where the child friendship would survive into adulthood. Certainly he followed her progress with great affection.'(p.2). 'Dodgson's friendship with Edith Denman was a deep one. Rarely do we find episodes in his life like the collection of flowers, and indeed the self-invitation to visit Alfreton. Professor Black suggests that Dodgson was attracted to Edith....'(p.6).
  - 4) Folcroft Library Edition, 1973:Reprinted edition of '*Feeding the Mind by Lewis Carroll* London, Chatto & Windus, 1907'
  - 5) *Feeding the Mind*, illustrated by Edward Coren, Reevenger Press, 1999. この判のテキスト部分は1907年判に従っていると書かれているが、テキストの段落の区切りの数が1907年判よりも多い。
  - 6) とぼけた洒落っ気のある挿絵。
  - 7) ドゥレイバーは9頁ある「まえがき」相当部分の見出しをただNoteとしているために、グッデーカーはこれを指してPrefatory Noteと呼んでいる。
  - 8) 英国人には分かっているために特に書かれていないと思われる。
  - 9) Hassard Hume Dodgson ( 1803-84 ) .
  - 10) 原文では一日の食事が、breakfast, dinner, tea, であるという。その場合のteaは夕食である。Tea-time ということばは、「夕食時」の意味で使われることがある。また、high tea は、早めの夕食、台所で働く人を早く帰すために時間を早めている日曜日の夕食を指して使うところもある。
  - 11) いわゆる「お茶」。紅茶あるいはコーヒーとお菓子など。
  - 12) sugar-plums 球形の砂糖菓子、ボンボン。
  - 13) a packet of conundram, ことばの意味の二重性にかけて地口で答えるなぞなぞ。難問、難題。
  - 14) pudding. 英国ではプリンのに他に穀類をベースにして蒸した食べ物 ( 脂身と粉、肉や木の実を混ぜて布に包み蒸したもの )、ヨークシャプディングのように焼いたものなどがある。
  - 15) rhubarb ダイオウ。根茎は健胃薬として使用される。食用ダイオウのルバーブは、大きな葉茎が美しい紅色をしている野菜で、葉と筋を取り除き刻んでジャムに煮てパイに入れる。
  - 16) ダイオウとマグネシウムは消化不良の治療に用いられた。
  - 17) 原語はtrot。馬の走り方で割とゆっくりとした心地よいテンポ。
  - 18) 原語はjump over。馬が障害を飛び越えることにたとえている。
  - 19) 約1.14リットル。
  - 20) cider。日本語のサイダーはsoda。
  - 21) 原語はcold tea。紅茶は英国では熱い飲み物。ビール、リンゴ酒、冷めた紅茶は英国では干し草刈りに出る伝統の飲み物。

- 22) 発酵乳の一種。ピールからバタミルクまで10種類の飲み物を挙げている。小ジョッキ1杯は約100ミリリットル強の量。合計で1リットル強の量となる。
- 23) Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) .イギリスの詩人。 *The Rime of the Ancient Mariner* や Wordsworth と共に *Lyrical Ballads* を書いた。
- 24) コールリッジは16才の時に、自ら毒をあおいで18年の命を絶ったトマス・チャタトンの死を哀悼した詩 ‘Monody on the death of Chatterton’ を書いている。この引用句 ‘angrily refused’ to be fed はチャタトンが貧しさから食べるものにこと欠いていたことを知って食事をさせようとした Mrs. Angel に対して、 ‘angrily refused to be fed--to be kept alive--by the bread of charity’ と、チャタトンの詩の編者で伝記作者の C. B. Willcox が *The Poetical Works of Thomas Chatterton with Notices of His Life* のなかの ‘The Life of Thomas Chatterton’ (p.cxxxvii) に書いている (1842年出版) 。キャロルはコールリッジの「チャタトン追悼」の詩を読んでいた記憶からこの語句をコールリッジと結びつけたのかもかもしれない。あるいは、コールリッジの
- 25) カナダのトマス・チャンドラー・ハリバトン (1796-1865) が1835-6年に『ノヴァスコシア』新聞に連載した *The Clock Maker* に出てくる人物。『時計商人』は、安物の時計をオールド・ヘンリーという馬に乗って売り歩く行商人サムスのユーモラスな話。1837年にはロンドンで海賊版が出るほどよく読まれた。ハリバトンは1856年にイギリスに移り住んだ。
- 26) Thomas Macaulay (1800-59) .イギリスの歴史家、政治家。 *The History of England* (1848-61) が有名。キャロルは歴史が苦手で、ヒュームの英国史を読みかけては中断したような記述が25才 (1857年) の日記にある。
- 27) Thomas Gray (1716-71) .イギリスの詩人。 *Elegy written in a Country Churchyard* (1751), 「田舎の教会の墓地で詠んだ哀歌」。キャロルは23才 (1855年) の冬休みにリボン大司教トマス・ロングリーの書庫からグレイの哀歌を借りて読んだことが日記にある。
- 28) *Professor at the Breakfast-Table* (1859) のなかの ‘Aphorism by the Professor’ から正確に引用している。著者 Oliver Wendell Holmes (1809-94) は、アメリカの医学教授で、医学専門書の他に詩、小説などを書いた。
- 29) キャロルがオールフリタンで泊まった牧師館は、現在は個人の持ち家となっている (セルウィン・グッデーカーが1983年に調査した時点で、その家は「コルビエール」という呼び名がついて、V. イーガン夫人が住んでいた)。
- 30) Lambeth Palace. 高等法院判事と家族が住む公邸。
- 31) 訪問のきっかけは6月25日にロンドンの園芸公園で開かれた女性画家たちを支援するためのバザーで、そこにイーディスの妹のグレイス (当時6才) を見て、グレイスの写真を撮らせて貰いたいと父親のデンマン判事に頼んだ。
- 32) 1865年4月18日。
- 33) この日キャロルはロンドンで友人のリドゥン、彫刻家のマンロー、友人ベインの母、を順次訪問してからデンマン家を訪ね、それから画家ミレーの家に行き初

めてミレー夫人に会った。初めて会ったミレー夫人の印象がよかったことを喜んで（ミレーの妻ユーフィーミア・チャーマズ・グレイ（1828-97）は最初の夫ジョン・ラスキンと別れてミレーと再婚した。離婚を禁じている英国国教の支配する当時の社会では彼女は公の席には出られなかった。キャロルがミレーを初めて訪ねた1864年4月7日から1年後に夫人に会えたことになる）、ここでもオルゴールをミレーの娘メアリに届けている。ケンジントンで弟のウィルフレッドと会うと、一緒に画家のアンダスンのところに立ち寄り、ラファエル前派の画家D. G. ロセティの所へ行った。ロセティの仕事場には彼の友人スウィンバーンがきていた。キャロルは初対面だった。夜は弟とオリンピック劇場へ行き芝居を見る。イーディスにオルゴールを届けたのは、ロンドンに出て次々と人を訪問して廻る一日のなかの一幕である。

- 34) イーディスには、翌年に『不思議の国のアリス』を、1869年にはドイツ語訳の『不思議の国のアリス』を贈った。

デンマン判事には1887年に『論理ゲーム』の本を、デンマン夫人には『シルヴィとブルーノ』を1889年に、その続編を1893年に贈った。それぞれ、イーディスが亡くなってから3年後、5年後、9年後である。

- 35) *The Hunting of the Snark* (1876年) は、『鏡の国のアリス』のなかの「せいうちと大工」の詩にならぶキャロルが作ったノンセンス詩の代表であろう。

- 36) 2行目の「- 掛かって」は、ひっかかってと読む。

- 37) 1984年版の第一章。どこからの引用かは示されず、M. コーエンやE. ハッチの手紙集には入っていない。

- 38) ものを比較するためには共通の単位が必要である、という原則をあてはめるところ。喜びが大きい小さい、という話題になり、喜びの度合いを比較するためにキャロル独特の計測単位を考えている。客観的に話を進めるために世の中の共通の物差しとなる単位を以前から学会に提案しているのだが、という思いつきを披露しているのはイーディスをノンセンスの通じる相手とみていたことを示す。

- 39) バイモは英語の別名を「蛇の頭」という百合科の植物で、花びらは紫の濃淡模様になっている。写真は九州大学名誉教授で植物学者の西村光雄先生撮影、ロシアのFritillary.

- 40) この時イーディスは「ハンサムで若き聖職者」と結婚することに決めたとグッデーカーは書いている。

- 41) 現在は、ロンドンユーストン駅から2時間半あるいは3時間のプレストン行き直通列車が出ている。

- 42) ドウレイパー夫婦が住んだ牧師館はチャーチ・ストリートにある古いエリザベス朝の建物で、教会からは90メートルも離れていなかった。1897年にこの牧師館と教会の間には新しい牧師館が建てられた。1950年には2番目の牧師館と教会の間にまた新しい牧師館が建てられた。現在この3番目の牧師館は老人ホームになっている。こうして、順次牧師館として建てられた3つの建物は並んで建ち、現在は普通の住居になっている。

- 43) 約1.6キロ。
- 44) キャロルのオールフリタン行きから99年経って、1983年にセルウィン・グッデーカーは子どもの頃にデージー・ウィルソンを知っていたという人に会った。デージーの兄のモーティマー・ウィルソンはオールフリタンで事務弁護士で州議会議員をしていた。ウィルソンの名前は今日でもオールフリタンでは力がある。
- 45) キャロルには子どもの頃に罹った百日咳の後遺症から気管支炎を引き起こす傾向があったのだが、この時はそれではなかったようだ。
- 46) John Tenniel (1820-1914). パンチ誌の挿絵で有名。キャロルの『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の挿絵を描いた。
- 47) サミュエル・レイノルズ・ホルのこと。
- 48) 「ひどい目」というが、キャロルの表現を文字どおり取ることはできないだろう。
- 49) ローマ軍が駐屯する以前から拓けていた古都。ロンドンから西南に275キロ、港町のプリマスから東北に70キロのところにある。
- 50) リチャード・ブロンディ司教(1257年没)が建立したと言われる。大聖堂ができる以前にその地にあったサクソン教会は大聖堂の東端にある聖マリア礼拝堂(The Lady Chapel)として残っている。1900年に南極探検を指揮したスコット隊長が櫓につけた旗が壁に掲げている。
- 51) 1942年に空爆の被害を受けたが、14世紀初め(1303年)のステンドグラスなど、古いものが残っている。
- 52) 当時の1ポンドは、現在のおよそ45ポンド、約9,000円。
- 53) 1083年にロジャー・ドゥ・モンゴメリがベネディクト派の修道僧のために建てた。主にノルマン様式の建物で、ドゥレイパーの時代までノルマン様式のままで残っていた部分は、西の塔、北のポーチ、教会の身廊と側廊であった。
- 54) 法廷弁護士と訴訟依頼人との間で裁判事務を扱う弁護士。ある種の下位裁判所を除いて法廷での弁論権がない。日本の場合は、事務弁護士と法廷弁護士の区別はなく、弁護士はみな法廷で弁護できる。solicitor: a lawyer who prepares legal documents, for example for the sale of land or buildings, advises people on legal matters, and can speak for them in some courts of law.
- 55) ヨークシャー州リーズから北へ約8キロの所にある。ドゥレイパーの時代にはリーズ教区とは別の一教区であった。
- 56) *Adel and its Norman Church, A History of the Parish and Church from the earliest down to the present day, 1909.*
- 57) 1497年の建物の一部は南の翼面に残っている。エリザベス1世は即位の知らせをこの庭の榎の木の下で聞いたという。その切り株は現在もみられるという。
- 58) 第3代ソールズベリ侯爵、Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil (1830-1903)。3回首相を務め、オクスフォード大学の総長。クライスト・チャーチで学ぶ。館はロンドンから北のハーフォードシャにあるハットフィールド・ハウス。ヴィクトリア女王をはじめグラッドストン、ディズレイリが訪れている。1871年の夏、グ

ウェンドレン（1860-1945）の11才の誕生日に、また年末から翌年の新年にかけて館に招かれて滞在したのを皮切りに、幾度か新年をハットフィールドハウスで過ごし、子供たちに自分が作った妖精物語を聞かせた。

### **Bibliography**

*Feeding the Mind*, Carroll Studies No. 8, Selwyn Goodacre, 1984.

*Feeding the Mind by Lewis Carroll*, Folcroft Library Edition, 1973. Reprinted edition of Chatto & Windus, London, 1907.

*Feeding the Mind*, illustrated by Edward Coren, Reeve Press, 1999.

*The Professor at the Breakfast Table*, Oliver Wendell Holmes, J. M. Dent, London, 1906.

*The Letters of Lewis Carroll*, 2 vols. Morton Cohen, Macmillan, 1979.

*A Selection from the Letters of Lewis Carroll to His Child-Friends*, Evelyn Hatch, Macmillan, 1933.

*Lewis Carroll's Diaries*, 8 vols. The Lewis Carroll Society, 1993-2004.

*The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge* vol.1, ed. E. H. Coleridge, Oxford, 1912.

*The Poetical Works of Thomas Chatterton with Notices of His Life. The Rowley Controversy, and Notes; illustrative of the Poem.* 2 vols., Cambridge. W. P. Grant, 1842.

*Topographical Dictionary of England*, 4 vols. 1848, reprinted edition, Hon-No-Tomoshia, Japan, 1995.

*I See All*, 5 vols., Arthur Mee ed., The amalgamated Press, at Fleetway House, London, (First edition without date.)

*A Social History of Tea*, Jane Pettigrew, The National Trust, 2001.

*The Afternoon Tea Book*, Michael Smith, Atheneum, 1986.

*Handbook for Travelers, in Russia, Poland, and Finland.* John Murray, London, 1865.

*Thomas Cook European Timetable*, 2004.